

の一般的なことを骨を例に取り解説し、次に各論、各骨について解説している。その一部について述べる。

(名古屋大学医学部)

## 唐代史における皇帝と医学

—太宗の場合—

山本 徳子

歴史の中における医学については、政治・経済・社会等との関係のあることは、周知の通りである。そのような事柄、ことに存廃に関わりのある「人」といえば、政治権力に強い力をもっている者であろう。これを中国史、唐代についていえば、皇帝が該当しよう。

そこで、今は、唐王朝第二代目の皇帝である太宗と医学との関わりあいを巡って考察したい。

太宗は、かつて医方・鍼灸書を読んだことがある。それによって、背部に五臓の孔穴があることを知り、五刑の中の一つである刑罰で、背中を笞で打つことをやめさせている。

また、貞観十九年(六四五)に遼東を攻めた時のこと、江夏王道宗が足を傷つけた際、それに針治療を施している。

る。これは、太宗が鍼灸書を読み、かつ実技をも心得ていたことが知られよう。なお、この遼東において、白巖城を攻めた時、右衛大將軍李思麻が矢に当たったのに対し、太宗は自分で、その傷のために血を吸ってやっている。これを見た將士たちは、みな感動した。この攻城戦では前軍總管契苾何力が稍を腰に当てられて負傷した。その傷は深く、病状は重かった。太宗は、自らそれに藥を塗ってやった。これを厚く感謝したのであろう契苾何力はのちに太宗が崩御した時、殉死しようとしている。

遠く遼東へ出撃し、軍勢・食糧など限りのある遠征軍は不利である。そのような時に、將士の意気を落さぬように維持し、嫌戦感をもたせぬようにすることは大切である。このような太宗の行為は、それに大きな力を發揮していたのではなからうか。

また、太宗麾下の武將の巨頭の一人であり、宰相にもなった李勣が、かつて急病になり、鬚灰を服用すると効果があらるとされた時に、太宗は自分の鬚を切って、灰にして賜った。李勣は泣いて厚く感謝した。これに対して、太宗は、社稷の計のためであるのみ、卿のためにしたのではない、

深謝するには及ばぬ、といっている。これについては、他の資料によると、太宗は、自分の後継者の保護・保育を頼みなかったのだという。そのころ、太宗の皇太子承乾には行状に問題が生じていた。これにひきかえ、二男の王は賢いという評判が高く、奪嫡を考えており、後嗣問題を巡って宮廷内は動揺していた。結局、皇太子は廃され、代って三男の王（高宗）が皇太子となった。

このようなことから考えられるのは、太宗が医薬についての知識をもっていたことにより、刑罰の施行法が変えられた。また、戦争時において將士たちに忠誠心をもたせ、皇帝の意図する戦争の続行が変更させられないようにする。さらには、自分の後継者問題のある時に、有力な臣下を引きつけ、献身を思わせる、といった事柄が関連していることが知られる。こういったことは、実は、王朝の存続問題についても深い関係のあることが考えられる。

（横浜市立大学医学部）